

竹本駒之助 女流義太夫一代記

「老い」と向き合うの段 ～3人の名医たち～

【チラシ使用写真】 竹本駒之助三五歳頃



今回は「熊谷陣屋」を語らせていただきます。
昨年の九月、「摂州合邦辻」をさせて頂いた後、歯が痛くなって、残っていた下の二本の歯のうち一本を抜くことになりました。そうしましたら、歯を一本抜いただけなのに、身体半分がなくなってしまうたかのようになって、体力も声の力(リキ)も落ちてきてしまったのです。歯のことで、これほどまで大変なことになるとは、想像もしていませんでした。

ずっとお世話になっている先生に「残りの一本もせいぜいあと二年くらいだね」と言われて、これは大変、今のうちにやっておかなければ、「二度と熊谷」はできないと思って決めさせていただきました。「熊谷」を語るには腹力が必要ですし、これだけ長い詞もあるので、となると、歯と顎の大切さを身にしみて感じます。なにしろ義太夫を語るときは、普通にお話ししているときの息ではとても足りません。はーっとすごい勢いで息を出すので、さし歯などは浮いてしまうくらいです。義太夫は歯が命、といってもおかげさまでありません。

上下とも義歯にしたのは十年くらい前のことです。豊竹嶋太夫師匠の紹介で、奈良の有山歯科診療所の水原恭治(みずはらきょうじ)先生にずっとお世話になっていますが、この方が神様みたいに上手な先生なんです。入れ歯は合わないと痛かったり、カチャカチャしたりするんですが、この先生は技工士さんがお辞儀するくらい器用で、ちよいどいいように直してくださるおかげで、普段は入れ歯のことを感じずにいられます。

この前先生とお話ししていたら「僕が最初に診たときは(実歯が)十本あったよ」とおっしゃっていましたので、十年間で少しずつ抜けていったのだと思います。一本ずつ歯が抜けていくたびに、文字の発音が汚くなっていくのが何よりも嫌でした。文字をきれいに発音することを、ずっと心がけてきたのに、自分の身体の都合でそうになってしまう。本当に不満で仕方ありませんでした。

その名医に何度も診ていただいて、「せいぜいあと二年」と言われたのですから大変です。とにかく三カ月にいつぺんは来なさいと言われて、秦野から奈良へ通っています。時間を作るのが大変なのですが、水原先生に診ていただかなければ、義太夫ができなくなってしまうから必死の思いです。

歯のほかにも、目が問題でした。どうも私は色々なことが目に来てしまうようで、嫌だなーと思うことがあると、目の調子が悪くなるんです。この前も、上のほうが暗くて見えないうちと思うときがあって、先生のところに行っ

たら、眼圧がものすごく上がっていた、ということがありました。

急性緑内障の手術を受けたのは十五年くらい前です。その少し前から、外を歩いていると向こうから来る人とよくぶつかる、危ないなと思っていました。あるとき、朝起きると真っ暗で何も見えないんです。気分も悪くなってきたので、近所の眼科に行き、何日かたつてから設備のある大きな病院に移ったんですが、その間に網膜剥離が起きてしまって痛くて痛くて。最終的に日本医科大学付属病院で両目を手術していただきました。左の目は手術した直後は視力が出たのですが、だんだん見えなくなってしまうました。右の目は二度手術して、二度目でよくなりました。

ところが昨年の夏、目の網膜を縫つてある糸が切れてしまったんです。ちょうど「合邦」をさせて頂いた前でした。義太夫の本の大きな字がぼんやりしか見えない。それでも稽古に行つたのですが、だんだん見えなくなつてきてこれはあかんと。先生にお電話したら、担当の日ではなかったのにも関わらず、すぐいらつしやいと言つてくださり、スタッフをみんな集めて「この人は人間国宝で、僕が手がけている大切な人です」と説明くださいました。本当にありがたいことです。

十五年前からお世話になっている、日本医大の小野眞史(おのまさふみ)先生です。そのときも先生に手術していただいたおかげで、無事に「合邦」をつとめさせて頂いたことができました。

病氣知らずできた私が、身体の衰えを感じるようになったのは、なんといっても、胃ガンの手術をしたときです。人間国宝の認定を受けた次の年（二〇〇〇年）、六四歳のときでした。なんの自覚症状もなく、人間ドックでみつかったのです。ドックの結果を聞きに行ったのが、一月三日、四日あたり。その場で「胃ガン」と言われました。主人に「騙されてるんじゃないか」なんて言われたくらい、それほどなんともなかったんです。

先生に「すぐ手術しなければならぬ」と言われましたので、すぐにはとてもできないと仕事のことを説明したのですが、先生は「僕たちが全面的に面倒をみますから」とおっしゃって、チームを組んで手術の段取りをすべて決めてくださいました。手術はたしか一月末か二月初めだったと思います。

そのとき診てくださったのが東海大学病院の幕内博康（まくりひろやす）先生で、先生自ら執刀くださいました。胃の三分の二を切除しましたから、結構な手術ですね。入院は二〇日ほどで、その前後を含めて舞台をお休みして、代わりの方をお願いすることになったのが、とても心苦しかったです。

十年くらいは定期的に検査に通っていましたが、おかげさまで胃はよくなって、その後はなんともありません。先生からは、お腹に力が入らないといけないので、たくさん食べなさいと言われましたが、胃を切った当初はそうそう食べられないのです。少しずつ何度かに分けていただくようにしていました。手術後しばらくは、切ったところが痛くて力を入れるのが大変でした。以前より

腹力も落ちてしまいました。とにかく稽古を積んでいくしかありません。

こうやって名医の先生方に親身に支えていただいているおかげで、なんとか続けさせていただいています。年をとるということは、なんにもプラスになりませんね。だんだん体力が落ちてきてしまいますから、落とさないよう、いかに現状を保つかで精一杯です。しかも、いい見本になってくださったいた師匠はみな亡くなってしまうました。言われたことを思い出したり、テープで聴かせていただいたりして、勉強させていただいています。

「熊谷陣屋」は、若太夫師匠の十八番（おはこ）でした。直接お稽古していただいたわけではありませんが、ずっとお伴していましたから、耳にタコができるくらい聴かせていただきました。お稽古は越路太夫師匠にしていたきました。越路太夫師匠は（若太夫師匠の）いいところは、いただいているんだよ。僕もそうしている。これはいいなと思うところを盗もうと思つて、どういう息の仕方をしていくかまで聴かせていただいた」とおっしゃってくださいました。若太夫師匠、越路太夫師匠とは、人物の表し方や、ご自分の思いをどこに持つていくか、ポイントが違います。基本的には越路太夫師匠に教わったように語らせていただきますが、自然と若太夫師匠に言われたことがあることもあると思います。

「熊谷」はなんといっても男の人の出し物ですね。本来なら、女性の私ができるものではないのですが、無理を承知で、命をかけて、今やらせていただきます。死んでもいいくらいの厳しい気持ち

でさせていただきます。

熊谷の気持ち、妻・相模の気持ち、今でこそわかるものがあると思っています。熊谷を訪ねた相模は、（子どもの身の上に）なにかあったのでは……と勘づいていたのではないか。熊谷が「なにに來た」と問うたとき相模はそれを悟らなければいけないかったのではないか――。考え始めると切りがありません。

越路太夫師匠はお稽古に行くたびに「いくつになつた？」とお尋ねになりました。今から思うと、きちんとやつてはいるけれど、まだ心情が届いてないなと思つていらしたんだろうと思います。今、師匠の前で語らせていただいたら、言われないでも済むかなあと思つたりします。

年をとるのはマイナスばかりと思つていましたが、そう思うと、ちよつとはいいことがあるのかもしれませんね。



【写真】二〇一十七年三月公演のチラシ